

軒もる月

樋口一葉

青空文庫

「我が良人をつとは今宵こよひも帰りのおそくおはしますよ。我が子は早く睡ねむりしに、帰らせ給はゞ興きようなくや思おもさん。大路おほぢの霜こほに月氷こほりて、踏む足いかに冷たからん。炬燵こたつの火もいとよし、酒もあたゝめんばかりなるを。時は今何時なんときにか、あれ、空に聞ゆるは上野うへのの鐘ならん。二ツ三ツ四ツ、八時はちじか、否いな、九時くじになりけり。さても遅くおはします事かな、いつも九時のかねは膳たねの上にて聞き給ふを。それよ、今宵こよひよりは一時いちじづゝの仕事しごとを延ばして、この子こが為ための収入を多くせんと仰せられしなりき。火氣くわきの満みちたる室しつにて頸くびやいたからん、振ふりあぐる鎚つちに手首や痛からん」

女は破やれ窓まどの障子を開ひらきて外面そとを見わたせば、向むかひの軒のきばに月のぼりて、此處こゝにさし入る影かげはいと白く、霜や添きひ来し身内みうちもふるへて、寒氣ふせは肌はだに針はりさすやうなるを、しばし何事うしも打うちわすれたる如く眺ながめ入いり、ほと長くつく息、月かげに煙けむりをゑがきぬ。

「桜さくら町まちの殿とのは最早もはや寢しん処じよに入り給ひし頃ころか。さらずは燈火ともしびのもとに書物しよぶつをや開ひらき給ふ。然さらずは机さの上に紙しを展のべて、静かに筆をや動かし給ふ。書かせ給ふは何ならん、何事うしかの御打おんうち合あせを御朋友ごほうゆうの許もとへか、さらずば御母おんは上うへに御機嫌おきげんうかゞひの御状ごでうか、さらずば御胸おむねにうかぶ妄想ぼうさうのすて所ところ、詩か歌か。さらずば、さらずば、我が方かたに賜たまはらん

とて甲斐なき御玉章に勿^{もつた}躰なき筆をや染め給ふ。

幾度^{いくたび}幾通^{いくつう}の御文^{おんふみ}を拝見だにせぬ我れ、いかばかり憎くしと思しめすらん。拝さば

この胸寸断^{むね}になりて、常の決心の消えうせん覺束^{おぼつか}なき。ゆるし給へ、我れはいかばかり

憎くき物に覺しめされて、物知らぬ女子^{をなご}とさげすみ給ふも厭^{いと}はじ。我れはかゝる果敢^{はか}なき

運を持ちてこの世に生れたるなれば、殿が憎くしみに逢^あふべきほどの果敢なき運を持ちて、

この世に生れたるなれば、ゆるし給へ、不貞^{をなご}の女子に計はせさせ給ふな、殿。

卑賤^{ひせん}にそだちたる我身^{わがみ}なれば、始^{はじめ}よりこの以上^{うへ}を見も知らで、世間は裏屋に限れる物と

定め、我家^{わがや}のほかに天地のなしと思はゞ、はかなき思ひに胸も燃えじを、暫時^{しばし}がほども交^{まじ}

りし社会は夢に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし。身は桜町^{さくらまち}家に一^い

年幾度^{ちねんいくど}の出替り、小間使^{こまつかひ}といへば人らしけれど、御寵愛^{ごてうあい}には犬猫^{いぬねこ}も御膝^{おひざ}をけがす

物ぞかし。

言はゞ我が良人^{をと}をはづかしむるやうなれど、そもそも御暇^{おいとま}を賜はりて家に帰りし時、

聳^{むこ}と定まりしは職工^{むこ}にて工場^{こうば}がよひする人と聞きし時、勿^{もつた}躰なき比らべなれど、我れは

殿^ごの御地位^{ごちゐ}を思ひ合せて、天女^{はてなこ}が羽衣^{はごろも}を失ひたる心地もしたりき。

よしやこの縁^{ゑん}を厭^{いと}ひたりとも、野末^{のすえ}の草花^{さうくわ}は書院の花^{くわびん}瓶にさゝれん物か。恩愛^{おんあい}ふか

き親に苦を増させて、我れは同じき地上に彷徨さまよはん身の、取あやまちても天上は叶かなひがたし。もし叶ひたりとも、そは邪道にて、正當の人の目よりはいかに汚らはしく浅ましき身とおとされぬべき。我れはさても、殿をば浮世うきよに誹そしらせ参らせん事くち惜し。御覽ぜよ、奥方おくめの御目には我れを憎しみ、殿をば嘲あざけりの色の浮かび給ひしを」

女子おなごは太息といきに胸の雲を消して、月もる窓を引たつれば、音に目さめて泣なきいづ出いづる稚児おさなごを、「あはれ可愛かあいし、いかなる夢をか見つる。乳まいらせん」と懷ふところあくれば、笑えみてさぐるも憎くからず、「勿もつた躰なや、この子といふ可愛かあいきもあり。此子これが為ため、我が為、不自由あらせじ、憂き事のなかれ、少しは余裕もあれかしとて、朝は人より早く起き、夜よはこの通り更けての霜に寒さを堪こらへて、『袖そでよ、今の苦勞は愁しづらくとも、暫時しばしの辛しん棒ぼうぞしのべかし。やがて伍ご長ちやうの肩書も持たば、鍛たん工場こうじやうの取締りとも言はれなば、家は今少し広く、小こ女おんなの走り使ひを置きて、そのかよわき身に水は汲くまさじ。我れを臍ふが甲ひなしと思ふな。腕には職あり、身は健かなるに、いつまでかくてはあらぬ物を』と口癖くちぐせに仰せらるゝは、何所どこやら我が心の顔に出でゝ、卑しむ色の見えけるにや。恐ろしや、この大恩の良人おつとに然さる心を持ちて、仮にもその色の頭あちはれもせば。

父おとの一昨年おとしうせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱よに夜よるも帶を解き給は

ず、咳き入るとては背を撫で、寐がへるとては抱起しつ、三月にあまる看病を人手にかけじと思し召の嬉しさ、そのみにても我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に、不足らしき素振のありしか。我れは知らねど、さもあらば何とせん。果敢なき楼閣を空中に描く時、うるさしや我が名の呼声、袖、何せよ彼せよの言付に消されて、思ひこゝに絶ゆれば、恨をあたりに寄せもやしたる。勿躰なき罪は我が心よりなれど、桜町の殿といふ面かげなくば、胸の鏡に映るものもあらじ。罪は我身か、殿か、殿だになくは我が心は静なるべきか。否、かゝる事は思ふまじ。呪咀の詞となりて忌むべき物を。

母が心の何方に走れりとも知らで、乳に倦きれば乳房に顔を寄せたるまゝ思ふ事なく寐入し児の、頬は薄絹の紅さしたるやうにて、何事を語らんとや、折々曲ぐる口元の愛らしさ、肥えたる腮の二重なるなど、かかる人さへある身にて、我れは二タ心を持ちて済むべきや。夢さら二タ心は持たぬまでも、我が良人を不足に思ひて済むべきや。はかなし、はかなし、桜町の名を忘れぬ限り、我れは二タ心の不貞の女子なり」

児を静かに寢床にうつして、女子はやをら立あがりぬ。眼ざし定まりて口元かたく結びたるまゝ、畳の破れに足も取られず、心ざすは何物ぞ。葛籠の底に納めたりける一二枚の衣を打かへして、浅黄ちりめんの帯揚げのうちより、五通六通、数ふれば十二通の文を

出していだ旧もとの座くらへ戻もどれば、蘭燈らんとうのかげ少し暗くきを、捻ねぢ出す手いだもとに見ゆるは殿とのの名。

「よし匿名かくしななりとも、この眼めに感じは変かるまじ。今日けふまで封ふうじを解とかざりしは、我われれながら心強こころしと誇あきりたる浅あさはかさよ。胸むねのなやみに射やる矢やのおそろしく、思おもへば卑怯ひきようの振ふ

舞まひなりし。身みの行ゆひは清きよくもあれ、心こころの腐くさりのすてがたくば、同じ不貞ふていの身みなりけるを、いざさらば心こころ試ためしに拝をし参まゐらせん。殿とのも我われが心こころを見給みたまへ、我われが良人をも御覽ごらんぜよ。

神かみもおはしまさば我われが家やの軒のきに止とどまりて御覽ごらんぜよ、仏ぶつもあらば我われがこの手元てもとに近きよりても御覽ごらんぜよ。我われが心こころは清きよめるか濁にごれるか」

封ふうじ目めときて取とり出いだせば一尋ひとひろあまりに筆ふでのあやもなく、有難ありがたき事ことの数々かずかず、辱かたじけなき事ことの山々さんさん、思おもふ、恋こひふ、忘わすれがたし、血ちの涙なみだ、胸むねの炎えん、これ等の文字もんじを縦横じゅうわうに散ちらして、文字もんじはやがて耳みみの脇わきに恐おそしき声こゑもて呶さゝくぞかし。一通ひとつは手てもとふるへて巻納まきおさめぬ、二通ふたつも同じく、三通さんつう四通しつう五通ごつう六通ろくつうより少し顔かほの色いろかはりて見えしが、八九十通はちくじゅうじゅう十二通じふにつう、開ひらきては読よみ、よみては開ひらく、文字もんじは目めに入いらぬか、入いりても得えよまぬか。

長ながなる髪かみをうしろに結むすびて、旧ふるりたる衣きぬに軟なへたる帯おビ、やつれたりとも美貌びばうとは誰たが目めにも許ゆるすべし。「あはれ果敢はかなき塵塚ちりづかの中うちに運命きんめいを持もてりとも、穢きたなき汚よごれは蒙かふむらじと思おもへる身みの、猶何所なほいづこにか悪魔あくまのひそみて、あやなき物ものをも思おもはするよ。いざ雪ゆきふらば降ふ

れ、風ふかば吹け、我が方寸ほうすんの海に波さわぎて、沖の釣舟つりぶねおもひも乱れんか、風なぎたる空に鷗かもめなく春日はるひのどかになりなん胸か、桜町が殿の容貌おもかげも今は飽くまで胸にうかべん。我が良人をとが所為しよゐのをさなきも強しいて隠くさじ。百八煩惱ひやくはちぼんのうおのづから消えばこそ、殊こととさら更に何かは消さん。血も沸かば沸け、炎も燃へばもへよ」とて、微笑を含みて読みもてゆく、心は大滝おほだきにあたりて濁世だくせの垢あかを流さんとせし、某それの上人がためしにも同じく、恋人が涙の文字もんじは幾筋いくすぢの滝のほとばしりにも似て、氣や失なはん、心弱をなごき女子ならば。傍そばには可愛かあゆき児の寐姿ねすがたみゆ。膝ひざの上には、「無情の君よ、我れを打捨て給ふか」と、殿おとゑの御声ありあり聞えて、外面そとには良人をとや戻らん、更けたる月に霜さむし。

「たとへば我が良人をと、今此処ここに戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面おもてあかみて此膝これなる文ふみを取とりかくすべきか。恥づるは心の疚やましければなり、何かは隠くさん。

殿、今もし此処ここにおはしまして、例れいの辱かたじけなき御詞おことばの数々、さては恨みに憎くみのそひて御声おんこゑあらく、さては勿躰もつたいなき御命おいのちいまを限りとの給ふとも、我れはこの眼めの動かん物か、この胸の騒がんものか。動くは逢見あひみたき欲よりなり、騒ぐは下に恋しければなり」

女は暫時しばしうつとり 惚として、そのすゝけたる天井を見上げしが、蘭燈らんとうの火かげ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にてりかへすやうなるもうら淋さびしく、四隣あたりに物おと絶えたるに霜

夜の犬の長吠えとほゞすごく、寸隙すきまも風おともなく、身に迫りくる寒さもすさまじ。来し方往かたゆ
 く末すへ、おもひ忘れて夢路をたどるやうなりしが、何物ぞ、俄にはかにその空虚うつろなる胸にひゞきた
 ると覺しく、女子をなこはあたりを見廻して高く笑ひぬ。その身の影を顧り見て高く笑ひぬ。
 「殿、我良人、我子、これや何者」とて高く笑ひぬ。目の前に散乱ちりみだれたる文ふみをあげて、
 「やよ殿、今ぞ別れまいらするなり」とて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の
 色もなく、微笑の面おもてに手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断なに為し終りて、
 熾さかんにもえ立つ炭火の中うちへ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず、煙りは空に棚引たなび
 き消ゆるを、「うれしや、我執着わがも残らざりけるよ」と打眺うちながむれば、月やもりくる軒たなば
 に風のおと清し。

(終)

青空文庫情報

底本：「全集樋口一葉 第二巻 小説編二〈復刻版〉」小学館

1979（昭和54）年10月1日第1版第1刷発行

1996（平成8）年11月10日復刻版第1刷発行

初出：「毎日新聞」

1895（明治28）年4月3日、5日

※「良人」に対する「をつと」と「おつと」、「女子」に対する「をなご」と「おなご」の混在、旧仮名遣いにはそわないと思われるものも含めて、ルビは全て底本通りとしました。

入力：もりみつじゅんじ

校正：浅原庸子

2003年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

軒もる月

樋口一葉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>